

国民道徳教育を強化する「制度」としての「母」

——『不如帰』における母親の人間像を例に——

FAN MINLI (中国 広東外語外貿大学)

『不如帰』は、徳富蘆花の出世作であり、明治 31(1898)年 11 月から翌年 5 月まで『国民新聞』に連載された作品である。それは、日清戦争を背景に、結核を患った浪子が姑に追い出され、鬱々とした末に夫の武男に分かれの挨拶さえできずに死別した物語である。物語は、主人公の武男が、浪子の墓前で浪子の父である中将と再会し、握手を交わし、「台湾経営」を展望するということで結末する。本稿は、先行研究を踏まえ、国民国家¹という視点に基づき、『不如帰』(1898)における「母」という人間像作り、それから、「母」の果たした役割に対する検討を通して、「三国干渉」(1895)後、文学者がいかにして文学創作を通じて国家の期待に応えたかということ、それから、「制度」としての「母」の人間像がその役割を果たすメカニズムについて垣間見ようとするものである。

1. 「三国干渉」後の明治社会の課題と官民一体的対応

「三国干渉」された結果、日本は衝撃を受け、西洋列強からの脅威に強い危機感を抱くようになったとともに、白人世界と決戦しなくてはならないと認識し、戦意を高揚させていた。が、戦争に対する一般国民の態度は、明治政府の期待とはかけ離れていたのである。このように、当時の明治政府は、いかにして国民精神を結集し、白人に対抗する新たな帝国戦争に備えるかといった課題に直面せざるを得なかったのである。この情勢のもとで、日本政府は施策を講じるだけでなく、文芸界なども、明治政府の施策に呼応し、官民一体となってこの解決に取り組んだのである。

1.1 日本政府の施策

一つ目は、日本は、「強兵」に重心を置いた政策を強化した。まず、明治政府は「強兵」政策を推進するため、10 年間をかけて陸海軍の規模を倍増する、という拡張計画を立てた。さらに、明治政府は、人口増殖を基本国策とした²。中でも、男子は戦争において非常に重要な役割を果たすため、男子の確保が特に望まれていた。それから、国民への呼びかけである。日本政府は、メディアを動員し、ロシアへの復讐に貢献するようにという世論を醸す一方、教育関係者に「臥薪嘗胆」というイデオロギーを生徒たちの胸に植え付けてもらうこと⁴を通し

¹ 「国民国家」について、いろいろな議論がなされてきているが、本稿は主に「国民国家論」を踏まえ、「国民国家」の一側面への考察を行うものであることを断っておく。1990 年代の初めから、明治維新以来、日本政府が築き上げてきた近代国家を「国民国家」としてとらえ、国民国家の原理、国民国家の歴史過程及び国民統合のための強力なイデオロギーなどを探求する国民国家論が歴史学者である西川長夫によって提起された。国民国家論の提唱は、歴史学のみならず、社会学、文学など諸分野に影響を及ぼし、女性の国民化の問題、文学作品のカノン化と国民国家の形成との連動などが議論され、日本政府はいかにして国家のイデオロギー装置を通して、国民統合を行ってきたかが明らかにされつつある。本稿は、国民国家論の問題意識を共有しながら、日本政府による国民精神の構築に関心を寄せ、論述を展開していく。

² 李卓(2011)「近代日本の人口状況と人口政策」『日本研究』(4)、第 50 頁

³ 藤村道生著、米慶余訳(1981)『日清戦争』上海訳文出版社、第 186-187 頁

⁴ 「教室には極東の地図が掛けてありましたが、それはいうまでもなく遼東半島のところだけ赤く塗りつぶしたものでした。話しながら先生が黒板に、特に大きく書かれた『臥薪嘗胆』の文字は今も心に浮びます」(高橋修<2020>「危機の時代に

「臥薪嘗胆」の共感を国民に呼び起させ、「強兵」への参加・貢献を強く訴えていた。

二つ目は、国民精神の結集である。特筆すべきなのは、国民性の形成及び国民道徳の涵養のために、1890年に制定・頒布された「教育勅語」に基づき、国民への道徳教育を重視・強化することである⁵。周知のように、儒学的倫理及び家族道徳を強調した「教育勅語」は、それを注釈する「勅語衍義」(1891)とともに、家族国家観を国民の精神的支柱だけでなく、国民道徳の中心と位置付け、家族国家制度の整備に大いに寄与したのである。こうした中、良妻賢母教育への重視も強まり、家族制度及び家族国家制度への擁護が強調されてきた⁶。結果として、家政・家族の管理を含む家庭生活全般の運営及び家庭内の教育という役割を果たす母は、一つの「制度」として、国民精神の結集に力を発揮するよう期待されていた。

1.2 時局に順応した文芸界

明治政府による国民精神の結集を背景に、文芸界の人々は時局に便乗し、国民道徳を唱え、または戦争動員を支持するようになった。象徴的なのは、坪内逍遙は、戦争の役割は国民の気魄を高めることであるとし、作家は戦争に参加した国民の感情を描かなければならないと主張した⁷。

その姿勢は、当時の多くの文学者にも見られる。中でも、徳富蘆花はもっとも代表的な者だろう。「三国干渉」に大きな刺激を受けた徳富蘆花は、「臥薪嘗胆」をテーマにして、「露西亞を相手に、日本はまだまだ力の不足を感じず。兵も強くせねばならぬ。富も殖さねばならぬ。すべてに成長せねばならぬ」⁸と強く主張している。

時局に順応する姿勢は文芸界において広まりつつあった⁹。その結果、この時期、国民道徳に関する作品が多く創作された。なかでも、国民道徳を強める明治政府の施策に呼応した、徳富蘆花の手になる、「母」という人間像が描かれた『不如帰』がもっとも有名である。

2. 「制度」としての「残酷」な母

『不如帰』における、姑であるとともに母でもある慶子は、自分の要望や期待に応えられない息子や嫁に、厳しく当たりちらし、いかにも残酷な母であるように読者の目に映る。では、慶子を残酷な母(姑)たらしめた理由はどこにあるのか。

読む『不如帰』『国立女子短期大学文科紀要』<63>、第34頁)という回想文が当時の教育現場の雰囲気を与えている。

⁵ 明治政府は、儒学的な倫理を軸に、国民道徳教育を一層展開するようになった。第一に、明治政府は『師範教育令』(1897)、『小学校修身教科書提案』(1899)などの公布により、学校教育制度における孝悌、親愛、勤儉、恭敬、貞淑といった儒教道徳の重要性を再確認した。第二に、明治政府は「御真影」礼拝、勅語奉読などの学校儀式をさらに強化し、勅語の精神を植え付け、儒教道徳を浸透させるようにした。第三に、学校は日本政府の政策に積極的に応じ、修身教科書で勅語の精神を教え、忠孝仁義などの道徳倫理を生徒たちの胸に植え付けようとしている(国光社編輯所 編<1902>『高等小学修身書』国光社 第1—99頁)。

⁶ 女子教育は「生活に必要な学芸技芸を知得せしめ併せて優美高尚の氣質を訓練し温良貞淑の徳望を涵養し以て勤儉節約の良風を与へ他日良妻賢母たるを得せしめ」とあるように、良妻賢母教育は家族制度に適する貞淑な良妻賢母の養成を強調し主張した。それに加え、良妻賢母教育は、女性に対して、家庭内の役割の遂行による国への貢献、家族国家制度への擁護を説いている。(姜華<2011>「高等女学校における良妻賢母教育の実践に関する一考察—校長などの訓話・校訓・生徒心得・寮生活などの分析を中心にして」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』19<1>、第83頁)。

⁷ 汪海洪、柴紅梅(2012)「近代日本文学的植民地意識」『日語知識』(12)、第30頁

⁸ 徳富蘆花(1930)『蘆花全集 第16巻』新潮社、第351頁

⁹ 徳富蘆花の兄である徳富蘇峰は、「三国干渉」に「屈辱」を感じたため、「平民主義」から国権論へと立場を変え、「変節したのが象徴的なことである。

2.1 家族制度を擁護・保護する「制度」としての母

『不如帰』においては、「家族制度が重要なモチーフとな」¹⁰っている。慶子は、家族制度の伝承者として、儒学的道徳を涵養し、それを自ら実践したうえで、息子の武男と嫁の浪子に厳しく要求している。

慶子は、家族制度に従い、夫からの暴力に逆らうことなく、舅や姑のことを気遣い、子育てに尽力し、良妻賢母としての役割を果たしている。そればかりでなく、封建的家族制度に苦しみながら母になった女性が、今度は逆に、儒学的道徳、家族制度を価値観として内面化し、その伝承者・執行者となり、息子や嫁を儒学的道徳の項目通りに成長させるのである。

息子の武男に対しては、慶子は、何よりも武男の「出世」を願い、川島家の家運をあげ、その存続の確保、ひいては「天子様」への恩返しを期待している。一方、嫁の浪子に対しては、慶子は、かつて「制度」としての母や姑に叩き込まれてできた基準で、家政の技能に関して過酷といえるほど厳しく要求する。もっとも残酷なのは、浪子が結核を患い、壮健な子供を産む生理的能力を失ったと分かり次第、次に分析していくように、川島家のため、壮健な跡継ぎが確保できないとの理由で、慶子が浪子の追放を断行することである。

2.2 壮健な嫡子・嫡孫を確保する「制度」としての母

近代に入って以来、家は日本という国家の末端組織として位置づけられたため、家業の繁盛、家の伝承が至上命題とされていた¹¹。その意味では、「家」にとって、男子は必要不可欠な存在である。男子の誕生を望む風潮のなか、家の伝承を確保するため、母は跡継ぎとしての嫡子・嫡孫の誕生を第一にする。『不如帰』において、慶子は、何よりも浪子に嫡孫の誕生を期待・要求している。

が、浪子は症状が悪化し、咯血するようになる。母は浪子が孫を生めないかと心配するようになる。そこで、浪子の療養中に、慶子は片岡家に離縁を申し入れ、武男と浪子との離婚を強要する。浪子を実家に送り、武男と離婚させるという、慶子の一連の行動から、壮健な跡継ぎを確保する「制度」としての母の役割が伺える。そればかりでなく、慶子の残酷さが浮き彫りにされている。武男と浪子は相思相愛で、切っても切れない若夫婦である。が、壮健な跡継ぎを確保する「制度」としての母は、二人の深い愛情を無視し、容赦なく「賢母」になりかねる浪子と武男とを引き裂こうとする。

母のこういった残酷な行動により、武男は愛する妻が奪われる一方、浪子は、武男と別れを告げることさえできずに死への旅路をたどっていく。このように、「家の内実を支配する『母』に対する息子の抵抗と敗北の物語」¹²を綴っているように見えるが、実は、『不如帰』は、壮健な跡継ぎを確保する「制度」としての母の役割を強調しているストーリーなのでもある。

2.3 家運を国家事業に結託する「制度」としての母

男爵の家である川島家は家運の衰退一途にさらされている。そのため、武男は川島家の息子として、家運をあげる責任、ひいては、華族の子弟として国運の隆盛に貢献する責任を負わされている。慶子は、武男を責めながら、武男にひたすら戦場に赴き、軍人としての役割を果たし、国のために軍功を立てて衰退の一途を辿っている川島家を守ってもらうという決断をする。

¹⁰ 富田哲(2017)「明治期の文学に見える『家』意識—法学と文学との交錯」『行政社会論集』29(4)、第82頁

¹¹ 李卓(2006)「家的父権家長制—論日本父権家長制的特徴」『日本研究論集』(00)、第354頁

¹² 山下悦子(1991)『マザコン文学論：呪縛としての「母」』新曜社、第40頁

浪子との愛情が破壊され、自分の身から浪子が奪われた武男は憤慨するが、それは、彼にかえって『軍人』として生き直す契機を与え¹³、「その憤懣を日清戦争の戦闘エネルギーに転化させ」¹⁴たのである。死の覚悟を抱きながら日清戦争に身を投じた武男は、戦場で「火の洗礼」を受け、「生きる力」、「男の力」¹⁵を得ており、日本帝国にとって合格した軍人に「成長」した。

戦場から「凱旋」した武男は、「赫々たる戦功」をもって明治国家に褒賞され、「大尉」に昇進し、「御勲章や御賜金」まで獲得する。周囲から「若旦那様」と呼ばれるようになったことに象徴されるように、武男の社会的地位が高くなっただけでなく、川島家の家運が向上したのである。それに加えて、「戦功」をおさめたことにより、武男は華族としての役目を果たし、国運の隆盛に大きく「貢献」したのである。換言すれば、川島家の安泰と日本の国家事業とは巧みに一体化されている。むろん、その背後には、武男を戦場に駆り立て、「富国強兵」の道を歩ませた母の力がある。このように、『不如帰』は、母を家族国家制度を確保するための「制度」として描いている。

3. おわりに

「三国干渉」後、予想した帝国戦争に備えるために、日本は儒学に基づいた国民への道德教育を強化することをもって国民精神を結集するという緊急課題に迫られた。こういう状況のもとで、明治政府は、良妻賢母主義の実施を強化し、家族制度を擁護・保護する制度・壮健な嫡男を確保する制度・家運を国家事業に結託する制度として、家族・国家における母の役割を強調していた。時流を反映した『不如帰』において、母・姑という二重の働きを果たす慶子は、家族制度を遵守し、自ら実践するのみならず、息子の武男に家を背負わせ、戦争への参加で国に奉仕させる一方、嫁の浪子に良妻賢母になるように厳しく教化し、家族国家制度を確保する「制度」として力を発揮していた。その意味では、『不如帰』は、「夫婦愛」を標榜する物語ではなく、国家的叙事詩と呼応した物語と見直されるべきである。『不如帰』の行間からは、近代日本文学者が国民道德の強化という強い訴えのみならず、日本の近代国家建設の推進と侵略の鼓吹に寄与していることが読み取れるのである。

参考文献

- 高橋修(2020)「危機の時代に読む『不如帰』」『共立女子短期大学文科紀要』(63).
- 富田哲(2017)「明治期の文学に見える『家』意識—法学と文学との交錯」『行政社会論集』29(4).
- 伊藤真希(2012)「国民の模範としての華族の家庭教育」『法政論叢』48(2).
- 李卓(2011)「近代日本の人口状況と人口政策」『日本研究』(4).
- 李卓(2006)「家的父権家長制—論日本父権家長制的特徴」『日本研究論集』(00).
- 高田知波(1997)「『戦前』文学としての『戦後』文学—『不如帰』への一視点」『樋口一葉論への射程』双文社出版.
- 牟田和恵(1996)『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』新曜社.
- 山下悦子(1991)『マザコン文学論：呪縛としての「母」』新曜社.
- 遠山茂樹(1988)『日本近代思想大系2 天皇と華族』岩波書店.
- 谷崎潤一郎、伊藤整[ほか]編集 徳富蘆花[ほか]著(1968)『日本文学5 樋口一葉 徳富蘆花 国木田独步』中央公論社.

¹³ 高橋修(2020)「危機の時代に読む『不如帰』」『共立女子短期大学文科紀要』(63). 第40頁

¹⁴ 高田知波(1997)「『戦前』文学としての『戦後』文学—『不如帰』への一視点」『樋口一葉論への射程』双文社出版. 第203頁

¹⁵ 徳富蘆花(1926)『富士 第2巻』福永書店. 第92頁